

命の鑑定士・2

恭介

序章

全ての物事には代償が払われる。例えばジュースを飲むために金を払い、走るためには体力を失う。如何に些細だろうと代償なしに得られるものはないのだ。それは、奇跡と呼ばれる事象として例外ではない。『何も失っていない。神様が助けてくれたのだから』本当に...？神を信じ、崇めるのは自由だ。けれど、信じる事は時に盲目も伴う。疑い、回りを見ることだ。何を失ったのか。もし、それでもわからなかったのなら、神はそれすら代償として奪ったのかもしれない。

災難は畳み掛ける。昔の偉人が遺した言葉だが、優子は身をもってその意味を知った。今の優子にとっての災難は大きく二つあった。その一つ目が目の前にある。学校の渡り廊下に呼び出されて男の子と互いに向き合っている。「ごめんなさい。今、そういうの興味ないの」謝って、名残惜しむことなく場を去る。一瞬顔だけ後ろを伺い、確認する。男の子はガックリと肩を落として項垂れている。（良かった...。）いや、人の好意を振っておいて失礼か。でも優子はそう言いたい。しつこいと一度や二度振っても諦めない男の子もいるからだ。校内への重い鉄の扉を開け、入ると扉に背を預け「はぁー...」と優子は大きなため息を吐いた。この全く晴れない気分。憂鬱になりそうだ。まだ午後の授業もあるというのに。「藤沢君も振るか。女子の間じゃポイント高いんだけど」聞きなれた声がある。どうやら階段に隠れているようだ。「だったら、みいが代わりに付き合えば？」壁越しにポケットから出した封筒を出す。ひょいと腕だけ突き出して奪う。「なにになに.....うっわぁ...内容がベタねえ...」「そう？キザなセリフ書くよりストレートで割りと好感はいいけれど」というか、人の告白文にダメ出し。向こうでショックを受けている本人が聞いたら当分立ち直れなさそう。「でも、振ったと。これで七人目だっけ？」「六人よ。勝手に増やさないで」人を色魔みたいに言わないで欲しいものだ。あの不思議な体験から一ヶ月が経って、優子は学校に復帰し登校している。病院での精密検査、自宅での日常生活、共に問題なしということで許可が下りたのだ。ただ、週に一、二回の通院が条件とされて、早退がちらつくがその回数も若干減った。「もう治ったので大丈夫です」喉まで出かかる言葉を呑み込んでいるが正直言いたい。まあ、理由が言えないからそれは我慢である。そして、心に不安と楽しみを抱え、いざ登校して三週間。感想は？、と聞かれたら「最悪かも...」と答えかねない。別にいじめを受けている訳でもない。ただ、目立つことが苦手な優子にとってはそう言わざるを得ない。原因は今さっきの事だ。つまり告白。優子は復帰してからすぐに注目の的になった。仕方ないことだ。皆、優子との思い出など幼い頃ばかり。小学三年の記憶から次に会ったのが中二。成長期たる年頃だ。会えば興味もでる。それが全ての始まり。病弱な女の子が治って戻ってきた。髪は長いストレート、性格は至って静か、加えて勉強は出来る。河合みなみに言わせると、漫画くらいにしか出てこない設定の女の子だそうだ。でも、優子自身そんなもの狙ってなどいなかった。髪は単に切るのが面倒だった。ケアもみなみが遊びに来るとやってくれていたから優子は何もしていない。性格は病院生活のせい。後はうるさいのが嫌いだから。勉強に関しては...、単純に暇潰し。勉強が暇潰しとは嫌味かと言われそうだが、ずっと入院してみるとわかるのだ。どんな事もすぐに飽きる。ゲームも美容も続かない。そして、人間の不思議な所。人間は自分がやらなければいけない物事にはやる気が中々出せない。けれど、自分にはその義務がなく、「やってみろ」などと煽られると没頭し、実力以上のモノを発揮する。優子の場合、治らない体で勉強の意味が感じられず軽い気持ちでやっていた。ほとんど遊び感覚だった。その隠れた才能はテストですぐに知られた。皆が、頭を抱える問題も涼しい顔で終わらせる。授業中に友人から聞かれる事にも嫌味なく丁寧に教える。「適当にあしらえば良かったのよ」みなみにはそう言われた。でも、病院生活ばかりだった優子には頼られるという事は嬉しかった。そして、いつだったか勉強会として放課後教えてと頼まれた。二つ返事で頷いて始めた勉強会。それが原因で妄想の美少

女は現実と化し、噂は校内全域に広まった。「でも、男子諸君が盲目するのは無理ないわ。ここまで外見がぴったりの物件滅多にないから」「出来れば内面を重視すべきよ」優子は男の子が来ないうちにと階段を上がる。「若いうちはみんな外見ばかりで見るのよ」みなみは手紙を優子のポケットに押し込む。いや、戻されても困るんだけど…。階段を上ってすぐにもう一つの災難が来た。少くらしい休息があってもいいのに、と優子は思った。「ドウモ、コンニチワ」災難はすごい棒読みで挨拶を言う。「ドウモ、コンニチワ」優子も返す。内容から感情まで全てオウム返しだ。災難は言うだけ言うとそのまま教室へと行く。優子と同じ教室へだ。信じがたいことにあの少年は優子の学校へ転入してきていた。つい三ヶ月前くらいらしい。「何で、そういう重要な事を言わないかな」みなみに言うと「言っても優子絶対興味ないし。登校し出したのつい最近だったから。それに言おうとしたのあの気まずい日よ」悔しいが最初は正しい。何よりあの日のことを掘り返すかな普通。「毎回思うんだけど、あんたたちどういう関係なの」「いい質問ね。関係になりたくなかった関係かしら」言っけて意味不明だ。「最初、優子の好みかと——」ギロ。視線で殺気を送る。「——と思ったけどこれが違うのよね」落ち着けと、みなみは両手を前に制止を促す。「冗談じゃないわよ。大体、私色々とやることあるのよ。色恋沙汰は高校からで結構」「あー、前にも言ってたね。急ぎなら手伝うけど」「期限はないの。自分の事だから。みいは吹奏楽に集中してて」「私は平気よ。周りが付いて来れないだけだから」優子の気遣いも無用らしい。相変わらずだと思いながら二人は教室に戻る。…あ。言い忘れていた。あの少年の名前は桐谷恭輔（きりや きょうすけ）らしい。忘れていたわけじゃない。触れたくないだけだ。